



米国の世界覇権戦略と 市場が誤解している事

金融アナリスト
永山卓矢

【追加利上げ観測の後退の本当の意味】

外国為替市場では6月13～14日のFOMCでの超タカ派的な政策決定からドル高圧力が強まり、対円で今月11日には1ドル＝114円50銭近い水準に上昇した。しかし、翌12日にイエレンFRB議長の議会証言を機に追加利上げ観測が後退し、ドル安傾向に転じている。

このイエレン議長の証言は現状の物価動向を述べたに過ぎず、この発言だけで利上げ観測が遠のいたと判断するには本来的には無理がある。そもそも、フィッシャー副議長が主導権を握っているFRB執行部は、現状の物価の停滞は一時的なものに過ぎず、やがて2%の目標値に向けて上昇していくとの見解を示す事で、緩やかな利上げ路線を正当化していた。今回の議長の発言も、そうした路線から特に逸脱しているとは言えない。

今回のイエレン議長の証言の直前に、FOMC委員でハト派の代表格とされるブレイナード理事が発言している事に注目する必要がある。この理事はこれまで、FRB執行部が利上げに向けた姿勢を打ち出してきた中で、信用不安が強まったり、低調な米景気指標の発表が相次いだ事で利上げ見送りを決めるにあたり、米権力者層の意向を受けた財務省の指示で、FOMCが開催される直前に発言をする事で、市場にそれを事前に伝える役割を担ってきた。その人物が今回もこの時期に発言をしているという事は、権力者層が利上げ観測を後退させるように配慮しているという事が窺われるというものだ。

どうしてそうした事をしたのかというと、以前、当欄でも指摘したように、今秋に中国で5年に一度となる幹部人事が決まる共産党大会の開催を控え、習近平国家主席が専制権力体制の永続化を決める事を、米欧両巨大財閥や軍需産業系がいずれも望んでいるからだ。そのためには、その頃まで株高傾向が続いて信用不安が強まる状況を回避する必要があるわけだ。

【FRBの関心は一般物価ではなく資産価格】

とはいえ、FRB執行部は9月にバランスシートの縮小開始を決めて1年後にはそのペースを毎月500億ドルに拡大するだけでなく、利上げについても年内にあと1回、来年も3回決める意向を示している。にもかかわらず、市場は容易にそれを織り込もうとしない。それは、物価が目標値とされる2%の水準に到達するメドが立ちそうにないだけでなく、グローバル規模で米国への資金還流をもたらす事で新興国危機が起これば、それが米国にも悪影響をもたらす恐れがあるからだ。しかし、そうした市場の認識は、次の二つの点で大きな誤解がある。

一つは、FRB執行部は表向き一般物価の動向を金融政策の目標値に設定しているものの、本当は資産価格の高騰を気にしているという点。これまで、FRBはリーマン・ショックによる巨大な金融危機に見舞われた事で、3回にわたる強力な量的緩和策を推進し、日銀やECBもデフレ圧力から脱する事を目的としてそうした政策を続けてきた。それによりもたらされた巨大な流動性の多くが、不動産や株式、信用度の低い社債といった安全性が低い一方で、大きなリターンが見込めるリスク資産に向かった。さらに投資環境が先進国・地域に比べると未整備で経済基盤が脆弱でありながら、大きな成長が見込める新興国市場にも資金が向かった事で、新興国バブルも膨れ上がっていった。

今ではFRBが量的緩和策を終えて利上げの局面に入り、ECBも来年初以降、量的緩和策の縮小(テーパリング)に踏み出すようとしているなど、先進国・地域の中央銀行は日銀を除いて金融政策の正常化に向かっており、それによりたびたび中国はじめ新興国不安に見舞われるようになってきている。ところが、現在米国では新興国市場に流れた資金が還流して来ている。

この資金還流によって、思うように資産市況が妥当な水準に下げていかない。資産バブルが膨れ上がると、金融機関の財務内容も膨張し、それが崩壊すると不良資産を抱え込む事でその内容が悪化してしまうため、米政策当局としてはそれを未然に防ぐために資産価格の高騰を抑え込もうとしているのである。

だとすれば、今秋に中国で共産党大会が開催される頃まで株高傾向を持続させれば、むしろそれ以降はFRBの利上げの可能性を高める事になる。無論、株価が急落して信用収縮が強まる場面になると、一転して金融緩和策に舵を切る事になるが、それまではバランスシートの縮小だけでなく利上げも継続していく必要がある。むしろ、それにより米国への資金還流を強めて新興国危機に発展していけば、そうした新興国から流入してくる資金が安全資産に向かう事で米国がそれにより受ける影響は軽微なもので済んでしまい、比較対的に「米国一人勝ち」の状態を現出する事が出来る。新興国勢は、それにより米国債を中心にドル建て資産を「高値づかみ」するため、米株価が下落したりドル安に転じると新興国の対米債権が消失し、米国側から見れば対外債務を帳消しに出来る事になる。

【戦争を引き起こしやすい環境を醸成へ】

もう一つは、戦争を引き起こしやすい環境を醸成する事だ。

FRBが金融政策正常化に向かう事で新興国危機が起これば、米国が受ける影響はそれより軽微なもので済むとしても、米国でも株価が反落せざるを得ない。それにより、多くの新興国勢が痛手を負う一方で米大手金融資本勢がそれを売り崩す事で巨利を得る事が出来る。ただ株価は実体経済の重要な先行指標である以上、米国経済が景気後退(リセッション)に陥る事は避けられそうにない。そうすると、金融政策とともに財政面でも景気押し上げを目的に対策が実施される事になるが、そこでは公共インフラ事業や減税以上に、最も押し上げ効果が高いのが大規模な軍需を創出する事だ——すなわち、戦争を引き起こす事である。

米国が世界覇権を維持している大きな要因の一つが、世界最強の軍事力を保持している事だ。アラビア半島の巨大な油田地帯を押さえているのも、サウジアラビアの王室政府を軍事力で守っているからであり、世界でも群を抜く日本の貯蓄残高を利用出来るのも、「核の傘」で守るなどしてその日本を「属国化」しているからである。そうした最強の軍事力を維持するには、定期的に戦争を引き起こす事が不可欠であり、そのためには周期的に米国経済がリセッションに陥り、景気対策が必要とされる局面がもたらされる必要がある。

米国ではこれまで、2008年に1930年代の世界大恐慌以来となる巨大な金融危機に襲われた00年代を除き、10年ごとに西暦の一桁が「7」「8」の年に金融市場がクラッシュに見舞われ、「9」の年にやや持ち直すものの、「0」「1」の年には実体経済も悪化してリセッションに陥り、その後戦争を引き起こすという周期性がある。おそらく、FRBが金融政策の正常化に向かう事で新興国危機が誘発され、米株価も崩落していくだろう。

そこでFRBが金融緩和策に転じ、日銀もヘリコプターマネー政策や場合によっては外債購入に踏み切る事で一時的に持ち直しても、20年頃には米国経済もリセッションに陥る事で、イランへの軍事攻撃が現実味を帯びてくるのではないかと。

大事な事は、市場では物価動向の停滞や、新興国危機とともに米国経済も悪影響を受ける恐れがある事から、FRBは順調に利上げを推進していけないとの見方が根強いが、それは大きな誤解であるという事だ。FRBは、本当は一般物価ではなく資産価格の動向を気にしているのであり、意図的に新興国危機やリセッションに陥る事を目論んで金融政策を運営しているのである。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

ザ・テクニカル

13 本目までの我慢

日経平均株価早くも夏枯れ相場か、動きがさらに小さくなった。先週の高値は 20,157、安値は 19,943。レンジ幅は 214 円だが、週足の実体線は 25 円幅。その前週は 48 円では何もできまい。ただドル円は 7 月 11 日に 114.50 を付けて以来、円高傾向で先週は 111 円台まで下落した。その中で株式は横ばい。本来なら 3 月～4 月の如く下げ波動（円高、株安）を描いても不思議ではなかった。

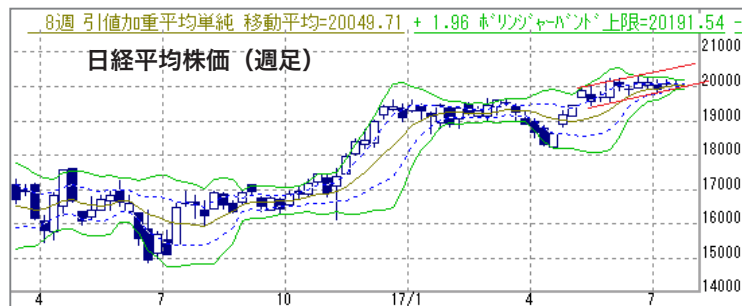
日経平均のパターンは「レクタングル系の調整」と考えているが、次第に値幅が小さくなっている。週足で見たボリンジャーバンドの収縮率も今年 2～3 月以来の収縮傾向。先週述べた如く「このレクタングルも週足で 10 本数えた。昨年 8～9 月の保合いは上放れ、今年 3 月までの調整は下抜け。交互の法則が適用されるなら、次は上放れと見るのが自然。そこで 2015 年 6 月に付けた高値更新が見えてくる……日経平均は 1996 年以来 21 年ぶりの高値を更新」といったニュースが報じられると信じている。来週はレクタングルの保合いも 11 本目を数える。前回保合いの如く 13 本目前後で上放れると見る。

今週の押し

為替市場のチキンレース

量的緩和に関するドラギ ECB 総裁の発言からユーロが買われたと解釈するのが本来真つ当な見方だが、逆に大きくドルが売られたと解釈した方が良いのではないかと。投機家のユーロ買いは今に始まった事ではない。CFBTC の建玉推移を見ると、長らく売り越しだった大口ポジションが買い越しに転じたのは 5 月 8 日の週（5 月 9 日分）。そこから 6 週間増加し、翌週 6 月第 4 週（20 日分）で半減した。この時の買い越し枚数は 44,852 枚。1 カ月後の 7 月 18 日分は 91,321 枚で倍になった。その間、ドル指数は下降線を辿っている。1 月 3 日の高値から今に至るまで押しらしい押しがない。先週末は 93.68 まで下落。ブレグジットショック時の安値（93.06）に迫っている。ユーロがこの下げに対するヘッジとして買われているなら、ドル指数の下落が続く限り買いは止まらないだろう。ここ 2 年のドル指数の最安値は、16 年 5 月 3 日の 91.92 である。

しかし、日足ベースでは 5 月以降のチャネルライン下限（今週は 2 万円丁度）が気になるところ。下抜けた場合の対処が難しいが、引け値で 19,800 を維持できれば、ダマシの下抜けと判断される。その後再び下限ラインに回帰すれば買いシグナルになる。しかし 5 月 2～8 日のマドの下限 19,464 を週の引け値で埋められれば、逆に下げトレンド確認で 18,000 円台は覚悟しておく必要がある。しかしそこでも 4 月安値更新が無ければ、やはり買いである。一方で今週切り下がった上値抵抗を抜ければボリンジャーバンドの拡大期に入り、相場はレクタングル上抜けへの準備を始める。遅くとも 8 月中までにはこれが始まると見る。



この時ユーロドルの高値は 1.1615。先週の高値は 1.1682 で上回った。15 年 8 月 24 日の高値 1.1705 は眼前に迫っている。ただ現在でドル指数の下降速度よりユーロドルの上昇速度の方が早くなっている点が懸念事項として残る。先述の内部要因を見ても、今後 2 週間以内に利食いが入ってもおかしくない。

今週は 1 月 3 日の安値から 29 週目。日柄的にドル指数の売りの日柄、ユーロドルの買いの日柄は限界に近付いている。ドルを売るにせよ、ユーロを買うにせよ、余程資金と時間の余裕がない限り、一度既存の利食いを待ってから動くのが得策だろう。

日足では依然として 15 日スローストキャスティクスとの間で弱気オシレーターダイバージェンスの状態。従って、いつ急落しても不思議ではない。当欄では 1.1500 以上の引け値にストップロスを入れて売り推奨していたがストップアウト。故に今週はいったん様子見して急落を待ちたい。そこから買い場を探る。

短期積極派は今週 1.1750 以上の引け値にストップロスを入れて売りを推奨。この戦略がヒットした場合、来月の新月（8 月 22 日）付近まで相場は安値を指向するのではないかと。

高く仕入れて安値で投げる投資家から 脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持ち続けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10 倍になる株など豊富な実例で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望銘柄掲載〉！



株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー
代表取締役社長

足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296 円（税込み）



今週の相場風林語録

誰もがじっとしておれないときの危険【4】

まして訴訟事、争い事は絶対避けるか、相場から離れるように心がけないと結果はひどいことになりやすい。

今週の**九星★波動**

引き続き不穏に注意

南雲 紫蘭

じりじり上がる株式相場は、不安を無視したような存在なのかも知れません。真夏の日の、まるでいつ雨が降ってもおかしくないはずなのに、なぜか暑く、いつまでも雨が降るような気がしないのですが、突然ゲリラ豪雨がやってくる。状況はそんなことなのかもしれません。低ボラティリティと金利差、世界的な運用難というのはミニ 2005～2007 年の状況とも言え、意外なことに相場は「円安」が持続するかもしれません。

尤も、その時代との最大の違いは金利差がついていくといってもその絶対差は小さい上に、その当時との違いは何といっても国際協調の弱さ、もっと言ってしまえば「予期せぬ政治リスクが払しょくできない政治構造」が常に不安を巻き起こす、といった違いでしょうか。その意味では持続的円高も金利差による資金の持続的フローもまた期待できないという事でしょう。

円安も円高も持続性に乏しく、「構造的レンジ」という世界

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (404)

中原 駿

秋はもうすぐ終わろうとしていた。秋の終わりには、安定した冬が来る前に不安定な状況が生まれる。野分という秋の訪れを意味する台風のような強風ではなく、いわば北おろしと言われる強い北からの強風である。秋風とは明らかに違う強い厳しい冬の嵐は、体感的にも心にも深く差し込む。

相場にも明らかに変調が始まりつつあった。急激な金利の上昇が始まったのだ。じりじり上がる金利は、むしろ長期債の評価損を増やしていたが、上野のポジションには問題なかった。

長期金利の急激な上昇はもちろん、短期金利の上昇も激しかった。短期金利の上昇は、大きな評価益を上野のポジションに与えた。だが、同時に非常に悩ましい問題も起こってきた。

第六感の サブサイクルは微妙



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

ユーロドルは上放れ

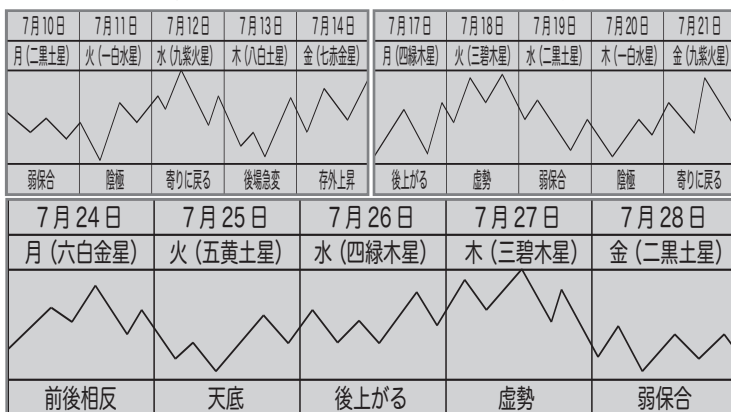
ドル円相場は 7 月 11 日、114.49 でダブルトップを付けて以来、週末に向け 111 円台まで下落。この時点で 6 月安値からの上昇幅に対する 50% 訂正まで落ち込んだ。先週は「しかしこの調整が 38～50% 押しに留まれば、依然として強気を維持し、ダブルトップは単なる上昇過程に置ける中段保合いの高値に過ぎない」と述べたが、ぎりぎりの処を試されている。7～11 週サブサイクルは今週は 6 週目に入る。前サイクルはボトムから 18 日目に天井を付けたが、現行サイクルは 19 日目に付けた。しかしここで天井を付けたとはまだ見ていない。サブサイクルも終盤に入るが、111 円を割って引けてくるようでは残念ながら天井を付けたと判断せざるを得ない。今後 7～11 週目にボトムを付けるまでは下降トレンドと認定される。現行サイクルは強気型、あるいは超強気型を想定していたが、5～10 週目まで上昇の可能性があるかと判断。しかし、今週反発に転じなければ（少なくとも週足で 113 円以上の引け値）、110 円を割る下げを見る必要が生じてきた。しかしそれでも 1 年サイクルはまだ上昇期。2 つのサブサイクルで準備段階的な底練りを演じ、第 3 サブサイクルでは今回の高値を取つてくると予想する。

従って 1 年サイクルの強気はまだ維持する。その上で、110 円を下回る下げには 8 月第 2 週以降買い場を探すことになる。現段階では 62% 訂正 110.99 以下で引けるまでは再度反

に突入したのかも知れません。

さて月盤が《三碧木星》に入った九星高下伝も後半です。《三碧木星》は「一気に加速して急落する」、つまり虚勢となりがち。

引き続き米株に不穏な値動きが観察されたら要注意でしょう。



短期の調達金利が上がってしまうことで日々の利差益が減ってしまったのだ。当時上野などが務める日本の都市銀行のポジションは — 今の金余りには信じられないが — 短期資金を調達し、長期で運用していたのだ。つまり短期のキャッシュポジションは常にショート（不足）していたのだ。

ローン（1 年～30 年で運用）に対し、短期（1 週間～3 カ月）で調達していることで大きな利益が生まれていた。このローンポジションをカバーする資金差益は金融機関の重要な、それこそベースと言って良い利益の根源。そこに利益が生まれなくなってきたのだ。上野は、部下の損失の穴埋めと同時に、シンガポール支店の利益の下支えをしなくてはならなくなった。

その結果、評価益の大きい短期債の空売りポジションを埋めざるを得なくなってきた。つまり、長期債券の大きな評価損 — 表面化していなかったが — だけが突出するポジションにせざるを得なかったのである。つまり危機的な状況であった。

発して、今週から来週にかけて 113 円台に乗せてくれば、8 月中旬までに高値更新、さらに強ければ 115 円台をチャレンジすると観たい。

先週は週間ベース、6 週移動平均（現在 112）が維持されている限りは強気を継続したいと述べたが、週の引け値で下回っても翌週上回れば強気トリガーに転じる。下回ればそのケースでは 7～11 週目（8 月中）にボトムを付けるだろう。

ユーロドルは先週上値を突破。これまで「ユーロドルが 1.15～1.6 を超えてくれば底練り脱出。数年間の上昇が始まろう。少なくとも 1.30 以上はある。ユーロ円は 150 円以上が目標となる……ユーロドルの調整が終わればまたこの動きが復活するだろう」。長い目で見れば 1.1 台は買いでよいだろう。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第48回】日経平均株価のサイクルについて (8)

37～55週のレンジを持つ46週サイクル以外に、メリマン氏のレポートではプライマリーサイクル(PC)という、実際の取引に際して“基本の(primary)”サイクルが存在します。

これまで、この日柄のレンジは13～19週でしたが、1950年からのサイクル再検証によって12～20週に変わりました。46週サイクルの中には通常、2～3つのPCが入るのですが、2年前からの動きを右の週足で見ると、PC2つで46週サイクルが形成されているように見えます。

また「サイクルの序盤は常に強気」「大きなサイクルがボトムをつける時に、内包するサイクルは歪みが生じて延長か短縮する事が多い」といった、これまで当欄で提示してきたサイクルの基本がチャートに現れています。

4月17日の安値は、46週サイクルとPCの起点でした。従ってここからの相場は強気であったというのも理解できます。ただ、問題はより長期のサイクルで現在が16カ月サイクルの天井をつける時間帯に入っているという点です。今週は4月の起点から14週目ですが、6月20日の年初来高値は起点から9週目。

昨年6月24日からの上昇相場であれば、起点から19週目でPCの天井をつけ、そこから急落したのですが、15年5月7日からの下降相場では、起点から14週目で2番天井が出現。ダブルボトムをつけて下降相場入りしました。従って、今週は過去の日柄から見て、上記どちらかのケースに分かれる重要な時間帯に入っていると思います。目先、6月高値超えに失敗すると前者のパターン。成功すると後者のパターンになると思います。



メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

7月27日付近が今週の注目点

ここ数週、当欄では7月20日付近が相場の注目点になると予測してきた。残念ながらNYダウと日経平均株価にこの予測は当てはまらなかったが、NY原油とS&P500は20日に週の高値をつけ、翌21日にユーロ/ドル、ユーロ/円、NY金が高値を、ドル指数、ドル/円が週の安値を記録した。

ジオコスミック的に今週初めにまだ若干の影響が相場に及ぶかもしれないが、太陽、火星、木星、天王星、冥王星によるカードナルサイン（牡羊座、蟹座、天秤座、山羊座）内でのグランドクロス状態は外れた。少なくとも“上下に大きく振れる可能性”から、加速か反転は判らぬもののどちらか一方に相場が進む可能性にシフトしたのではないかと筆者は見ている。

これに関連する天体位相については既に2週間前こう指摘“…22日（日本時間では23日）に太陽も獅子座にサインチェンジ。23日は新月。24日には金星・土星オポジション（180度）”。

そして一方向に進んだ相場は27日の太陽・火星コンジャン

クション（0度）の時間帯で節目をつける。今回20日付近で転換しなかったダウと日経平均はこの時間帯で何らかの節目をつけるのではないかと。前後6週間と通常よりも前後の日柄が長い、ここは株式相場の高値と合致しやすいとされる。

もう1つの要因として挙げられるのはヘリオ射手座ファクター（7月28日～8月7日）の存在。以前からここは“ユーロや金相場の大きな上下変動の特異日であり、急騰の場合はファクター開始日から4営業日前までに大きな下落がある事が多いとメリマン氏は指摘している”と述べているので、先週末にかけて上昇が続いていた両相場は、先週末の高値が高値継続でも24日までに反転下落し、今週末付近まで下落後反騰する可能性が想定される。ただ、この射手座ファクターは「上下変動の特異日」と記述しているものの、ここ最近では上昇よりも下降、それも急落場面と関連性が高いように個人的に思える。特に上昇が今週末まで続くようなら、より一層下落に注意したい。もしこの懸念が現実化した場合、中間点にあたる8月1～2日か、終了日の8月7日が次の反転ポイントになるだろう。奇しくも、後者の時間帯は水星逆行開始一週間前の時間帯に入っている。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 7月24日（月） 週間ギャップも直ちに埋める
- 7月25日（火） 急騰急落も元の木阿弥
- 7月26日（水） 為替、株式市場ボラタイル
- 7月27日（木） 重要変化日前後のオーブに入る（31日まで）
- 7月28日（金） 1週間の反動、動あれば静あり
- 7月29日（土） 相場世界に権威者はいない。権威だけでは食えない世界
- 7月30日（日） 今日の成功者は明日の敗者、その逆もあり

ラジオNIKKEI メリマン氏最新インタビューCD

年後半の注目点となるか？ 8月の皆既日食

メリマン・スペシャルCD
メリマン2017後半大予測！

出演：レイモンド・メリマン 解説：林知久（投資日報社）

緊急発売

サイクル、テクニカル、そしてアストロロジーで種々の相場を分析予測し、その的中率の高さから世界中にフォロワーを持つMMA（メリマン・マーケット・アナリスト）主宰、レイモンド・メリマン氏。そのメリマン氏に、ラジオNIKKEI社は毎年2回、彼が年末に上梓する年間予測本「フォーキャスト」執筆直後の12月と、発行後半年経過した6月に電話取材を敢行し、それをもとにした音声コンテンツを製作されています。相場以外の話題といえ、やはりトランプ大統領の今後の動向になるのではないのでしょうか。彼は1946年6月14日、月食（太陽と月を結ぶ直線上に地球が入り込む時間）の時に生まれています。これに加え、彼の出生図からは独創的、カリスマ性のある、名声も悪名もどちらも獲得出来るキャラクターである、とメリマン氏は分析しました。氏は、混迷の大統領選でトランプ氏が勝利する可能性があるという以前から指摘していた少数派の人でした。今年8月21日、全米で皆既日食が起こります。これは全米に、大統領に、そして相場にどんな影響を与えるのでしょうか。恐らくこの前後の時間帯は直近の注目ポイントになるのではないかと考えます。もちろん、このようなアストロロジーの話だけでなく、サイクル、テクニカルの観点も加えた日米株式、通貨（ドル円、ユーロドル）、金、原油、穀物の見通しについてもお聞きします。アストロロジーに興味の無い方にも「フォーキャスト」のサブテキストとして、メリマン理論入門篇としてお聴きください。

製作：ラジオNIKKEI 価格：6,480円（税・送料込）

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問合わせ：投資日報出版（株） <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込みは：投資日報出版（株）
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444



ザ・グレートリセットとは？

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。 Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト2017

アストロロジーとサイクルで 2017年の相場を読み解く究極の書

レイモンド・メリマン 著 秋山日播香・投資日報編集部 訳 投資日報出版発行 8100円（税込・送料別）

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問合わせ：投資日報出版（株） <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込みは：投資日報出版（株）
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444